

秩父のウナギを考える「秩父の生物多様性とSDGs 講演会」

環境アドバイザー

内藤 定芳

対象

一般（20人）

所要時間



1時間

場所

秩父宮記念市民会館ケヤキフォーラム

実施日時

令和3年1月24日

概要

つい60年前まで、秩父には海があった。昭和37年から玉淀ダムの工事が始まり、太平洋と秩父の荒川流域は確実に分断された。「秩父のウナギ」は一つのシンボルである。遡上、降下して種を残し、繁栄してきた殆どの生物が子孫を残せなくなった。秋ヶ瀬取水堰、明戸サイフォン、六堰の害と共にその存在を考える。

プログラムの
ねらい

「太平洋に戻れない秩父の水生動物」というタイトルで60分の講演を内藤が行った。荒川の中央部をダムで分断しているという現実を、埼玉県民と東京都民に考えてもらわなければならない。水利と僅かばかりの電力のために、他生物を殺し続けて胸が痛まないのだろうか。ウナギまで絶滅危惧種に追い込んでしまった。

プログラムの内容

1 秩父の生物多様性とSDGs 講演会（60分）

- (1) 玉淀ダムが建設される10年前に、埼玉大学の須甲鉄也教授達が調査した秩父の荒川流域魚類調査がある。荒川流域の上流2河川以外はウナギの生息が普通に確認されている。
- (2) 10数年前から、遡上を妨げる障害物の調査をしてきたが、今回改めて秋ヶ瀬取水堰、明戸サイフォン、六堰、玉淀ダムを取材してきた。主に魚道建設の推進状況を確認した。
- (3) 玉淀ダム下流の三堰の魚道については、ただあるという程度である。玉淀ダムは、絶えず16.8mの水位差で魚類は全く遡上することが出来ず、降下するにも発電のタービンに巻き込まれて切り刻まれるため不可能である。今更魚道でもないが、全く検討されてこなかった。
- (4) 玉淀ダムは、埼玉県と農林省(当時)が8億8千万円で設置したが、発電電力が少量であったため赤字を名目に既に東京発電に売却した。深谷方面の利水もあり問題を複雑にしている。
- (5) ウナギを絶滅から救うためには、河川の障害物を除去すべきだという答申と国土交通省の方針は検討さえされていない。ダム関連のハザードマップさえ検討がされないのは異常だろう。

受講者の反応

アドバイザーの事業報告内容ではないが、当日後段で、北里大学水産学部の千葉洋明准教授に、「持続可能なウナギの資源増殖を目指して」との講演を頂いた。

コロナ禍で、200名程度は収容可能な会場を、60名に制限するしかなかった。

当日はあいにく秩父地方は大雪の予報であったが、結局3cm程の積雪であった。

少ない参加者だったが、終了後沢山の質問が寄せられた。殆どは後段に対する質問である。鴻巣市や深谷市など、県西部からお出でいただいた方も目立った。皆様に感謝したい。

環境学習の様子（写真）

